

## 「ミャンマーの今と未来について」

選考委員 吉野 輝雄



私は、これまで4年間に4回ミャンマー（旧ビルマ）を訪れた。目的は、CFF(Caring for the Future Foundation／子どもと青少年の未来の基盤を築くことをミッションとする NPO 法人) の理事の一人としてミャンマーに日本の青年たちを送り出し、現地の活動団体と協働して現地の青年たちと共に貧しい子どもたちのための支援プログラム（スタディーキャンプ、以下 SC）を立ち上げ、参加するためである。初めて訪れた 2013 年には、20 数年間国を治めていた軍事政権が民主化政策に切り替えた直後であった。町には変化を期待する息吹のようなものが感じられたが、国民はまだ自由な発言、集会、活動などを行うことには慎重であった。私どもも訪問目的をボランティア活動とすることはできず、滞在中の移動・宿泊地を提示しなければ旅行 VISA すら取得することができなかった。しかし、2016 年にアウン サン スーチーさんを実質的な指導者とする NLD（国民民主化同盟）が総選挙で圧倒的な支持を得て新政権が発足した。国民の長年の願いであり、苦しい闘いの結果であった。幸い私どもが訪れる度に協働団体との理解と信頼関係が深まり、今年 9 月のスタディーツアー(ST)では、終始快く迎えて頂き、これからの協働ビジョンを語り合うことができた。

新しく生まれ変わった今のミャンマーがかかえている課題は何か？国際政治や歴史に詳しくない私が論じるには大きすぎるテーマであるが、変化するミャンマーを訪れ、観光ではなく現地の人々と協力してプログラムを進める中で感じとった課題を 3 つ挙げるとすれば、第 1 に、国内外から民主国家と認められる国造りの歩みを確実にすること、第 2 に、民族間の抗争を解決すること、中でも目下の課題はロヒンギャの人々との争いを終結させること、第 3 に、教育の問題、とりわけ子どもの教育環境の整備は国家の重大責任だ。今は義務教育制度が確立しておらず、子どもの多くが家計の担い手となっている（50%の児童が小学校を修了していない）。おそらく各国政府や企業関係者は、インフラ整備や産業・経済の発展などを挙げるだろうが、まず人間としての基本課題、国民生活の整備を優先させ、自立した国民による国造り体制を軸に置くべきではないかと私は考えた。

第 1 の民主化については、2014 年の第 1 回 SC 以来、NLD の本部を訪問し、軍事政権下の過酷な経験を聞くと同時に、政権移行が実現した後のビジョンを聞く機会があった。毎回、歓迎され NLD トップの人達から民主化への気迫に満ちた話が聞け、開国とはどんなことなのか実感でき貴重な体験であった。第 3 回の 2016 年 3 月は NLD 新政権への移行

直前で、訪問時にスーチーさんが外務大臣に任命されるなど組閣の概要がマスコミに報じられる前に、まさに歴史の転換点に居合わせる体験をした。

新政権ではスーチーさんは、最高顧問という実質的”大統領”となり、大臣の8割はNLD関係から選ばれたが、治安関係の3ポスト（国防、国務、国境）は軍人が占めることになった。つまり、憲法改正という大きな課題をクリアしなければ民主政権として政策実行できないという制約を抱えての発足であった。



2016年3月CFFキャンプでNLD本部を訪問 朝日新聞3/31→

それから1年半が過ぎた今年の9月、ミャンマーに4度目の訪問。民主化への歩みがどこまで進んでいるのか直に見聞きたいと興味しんしんだった。ヤンゴンの町中は相変わらず車で溢れていたが、主要道路は舗装され、信号も設置され始めていた。また、建設ラッシュで新しいホテルやショッピングビルが建設中であった。ヤンゴン大学も再開され（2014年に24数年ぶり）、大学生にキャンパスを案内してもらった。

しかし、重大な問題が発生していた。いわゆる”ロヒンギャ危機”だ。ミャンマー西部ラカイン洲にロヒンギャと呼ばれるイスラム教徒100万人が暮らしていた。ところが、今年8月末から半月余りの間に50万人余の人々が川を隔てたバングラディッシュへの避難が続いている。前例のない人道問題として世界中に報道され、ミャンマー政府に対する批判が集まっていた。なぜ？問題の根は何なのか？民族間の対立なのか？宗教的非寛容が背景にあるのか？1年前に25年にわたる長い闘いの末に民主化政権を樹立したNLDのスーチー最高顧問はなぜ沈黙しているのか？発言の自由を得た国民はこの事態をどう考え、どんな解決を望んでいるのか？私自身も次々と疑問がわき、関心をもたざるを得なかった。

実は、出発前から国際問題になっている事は知っていたので、飛行機の中で配付された新聞でマララさんの批判とスーチンさんへの手紙を読み、切り抜いておいた。STの最初の訪問先が“The88”（1988年に軍事政権からの民主化を求め、国中でデモ行進した記念館）で、民主化運動の実態を示す写真と生き証人からの話を聞き、ロヒンギャの人々の現実も写真で見せられた。ここで退出予定であったが、ラカイン洲に取材に行った職員による記者会見に同席することが許された。BCCの報道とは異なる説明に、現場に行って事実を見届ける事の大切さを感じた。また、帰国直前にスーチーさんがロヒンギャ問題について国内外向けに演説するTV番組があり、知人宅で観た。この番組をミャンマーの人々

が身を乗り出すように観ている姿からどれだけ国民にとって重大な関心事であるかが伺えた（演説は YouTube に公開されている）

<https://www.theguardian.com/world/2017/sep/19/aung-san-suu-kyi-myanmar-rohingya-crisis-concerned>

内容は格調高く透徹とした論調で、自己(国)弁護ではなく国際的視野と自国の歴史と現実を踏まえ、現政府の限界を滲ませつつ国際的理解を広く求めるものであった、と私には思えた。国民のスーチーさんへの強い信頼も感じた。



国境を越えて避難中のロヒンジャの人々



9/19 ロヒンジャ問題についてスピーチする  
アウン サン スーチー国家最高顧問

私は、この問題の背景を知る必要があると思った。1982年軍事政権下で「国籍法」が制定され、ラカイン洲に住むロヒンギャ人を（イスラム教徒の隣国バングラから移民手続きをとらずに移り住んでいる）“無国籍の不法移民”とみなして来た。仏教とイスラム教の違いを理由に排除しようとしているという報道は真実とは言えない。民主国家としての政策がなされてなかった不幸が今現在まで緒を引いていると思われた。

帰国後もロヒンギャ問題から目が離せなかった。10月はじめNHKのクローズアップ現代で『ロヒンギャ危機 “スー・チーのミャンマー”で何が』が取り上げられた。その概要が、異例と思える程詳しくネット上に記録されている

（<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4041/>）。私は、録画をし、マスコミ報道を鵜呑みせず、できるだけ公正な理解に努めている。それが、ミャンマーの人々の立場に寄り添い、真実に近づくあり方であると信じるからだ。

スーチーさんが1年間以上沈黙していた事を批難しノーベル賞返上を求めるという動きがある。スーチーさんは言い訳をせず、移民手続きをすれば居住を認める（追放することはない）と明言している。現NLD政府の苦しい立場は、今だ20%余を占める国境・国防大臣（軍人）に強く口出しできず、沈黙せざるを得なかったのかも知れない。1年半の新しいミャンマーはまだ民主主義が未熟な段階にある、と率直に認めるスーチーさんの演説が今も耳に残っている。むろん人権、平和の危機に猶予は赦されない。ミャンマーの軍隊がロヒンギャの人々を武力で国外に追い出しているのであれば批難は当然だ。事実とは？

どうしたら状況を変えることができるか？

国連は人道的立場から食糧、医療品などの支援を始めている。しかし、支援する先進国の民主主義の感覚でミャンマーを批判し、外からスーチーさんの退陣を要求するのは賢明なことか？公正で人権を損なわず、人々が安心して生活できる国造りをする営みには忍耐が必要ではないか。ミャンマーの現実理解と民主国家建設への支援（協働）こそが結局は平和を築く道だと私は考え、これからも草の根レベルでミャンマーとの関わりを続けて行くつもりだ。

国際基督教大学名誉教授